

地震体験談を活用した地域の世代間連帯防災活動

Enhancing sense of community beyond generations by sharing of earthquake experience narratives in local communities

○森 伸一郎¹, 久木留 貴裕²

Shinichiro MORI¹ and Takahiro KUKIDOME¹

¹愛媛大学 大学院理工学研究科 / 防災情報研究センター

Department of Civil and Environmental Engineering, Ehime University

²オリエンタルコンサルタンツ (元・愛媛大学大学院学生)

Oriental Consultants (Former Graduate Student of Ehime University)

Descriptions and narratives of earthquake experiences have been collected and compiled for research and educational campaign by efforts of many researchers and communities in the past disastrous earthquakes. Mori and Kukidome (2008) have been collecting narratives of experiences of Showa Nankai earthquake in Ehime Prefecture and reported activities related to the narratives. The objectives of this paper are to report examples of utilization of them for educational campaign on disaster preparedness activity of local community with enhancement of sense of community among three generations in Hisayoshi district of Ainan Town, Ehime Prefecture.

Keywords: Nankai Earthquake, earthquake experience, narrative, interview survey, hazard map

1. はじめに

現在、南海地震・東南海地震などの大地震の発生が危惧され、発生した場合の災害は広域的で大規模なものと想定されている。したがって、各市町村の地域に即した減災対策と住民の地震災害に対する防災意識の高揚とそれによる自助・共助面での対策が望まれる。

そのため、防災意識の高揚や啓蒙など防災教育は防災活動の中心に据えられている。しかし、防災教育を社会教育と学校教育の視点から見た場合、必ずしも連携は取られていない。また、家族に視点を移しても、都会に比べて地方では核家族化の進行が小さいとは言え、日常生活で災害を話題にする機会は稀である。したがって、災害体験も体験者による子世代への伝承はあっても、孫世代への直接の語りや子世代から孫世代への伝承は進んでいないものと推察される。

災害体験は、後世の地域住民に伝えるべく、体験者の思いを動機として、口述記録、日記、公文書、震災誌、郷土史、石碑など様々な形態で記録として残される。寺田寅彦が古く指摘しているように、災害のない経年とともに後世からは忘れ去られ、風化された頃に災害が再来することを繰り返してきた。

一般に災害体験者は防災意識が高く、その生々しい体験談は説得力があり、体験談の伝承は防災意識の向上に大きく貢献すると考えられている¹⁾。国においても防災啓蒙の観点から災害伝承を推進し力を注いでいる。災害体験談は災害が大きいほど、また、身近な者ほど知る者への影響が大きいと考えられる。

また、災害体験は地震の実態や地震動・津波などのハザードの実態把握にも有用である。武村は、文献より収集した関東地震の体験談548を整理して東京都における揺

れを詳細に調べ²⁾、その結果を一般に啓蒙している。このように、地震体験談はハザード評価や防災啓蒙の観点から有用な潜在情報であることがわかる。のものにいたものは災害体験の有無に大きく依存すると考えられるため、災害体験の伝承に関して様々に取り組まれている。地域における防災活動は、それに対する意識や知識に依存するが、そして、災害体験がなくても地域住民の災害の体験談を知ることや聞くことによる追体験は地域の防災意識の向上に効果的と考えられる。

このような地震体験談の収集活動はこれまででも多くある。しかしながら、これらの編纂された地震・津波体験談が、どのように利活用されているかは、報告も少なく把握できていない。体験談の利活用とその効果を評価する必要がある。

1946年12月21日に発生した昭和南海地震については、60年以上の経年で多く望めないとは言え、その体験者はまだ健在であり、彼らの体験談を収集して、それを共有すること、すなわち利活用することは地域防災活動に有効であると考えられる。しかも、その地震は、第二次世界大戦の終戦後1年余りに起きた地震であるので、戦後の混乱や都市空襲による荒廃からの復興過程のため地震災害の詳細な記録はあまり残されていない。したがって、体験談からは、あまり知られていない地域の地震被害や揺れに関して新たな発見もあり得ると考えられるため、地域災害研究としても有効であると考えられる。

そのような目的の下に 2006年より愛媛県内の各地で、著者らは、愛媛地震防災技術研究会と共同で、各市町防災行政部署の協力を得て、昭和南海地震の体験談の収集とインタビュー調査を実施してきており(森, 久木留, 2008)、愛媛県内において昭和南海地震体験談の収集が十分に可能であることを明らかにしている。

表-1 昭和南海地震の体験談収集と利用の活動の一覧

調査形式	調査地	聴取形式	調査者 人数	体験談 収集数	調査日
一研究者＋消防	愛南町深浦	個別聴取	3	1	2005年10月
一研究者＋消防	宇和島市	座談会形式	3	4	2006年12月9日(土)
一研究者	宇和島市	電話聴取	1	1	2006年12月16日(土)
一研究者	松山市	個別聴取	1	1	2006年12月30日(水)
南海地震フォーラム	松山市三津	座談会形式	2	9	2006年12月18日(月)
南海地震60周年記念フォーラム	松山市萱町6丁目	フォーラム講演	240	4	2006年12月21日(木)
事前調査兼昭和南海地震体験座談会	宇和島市津島町須下	座談会形式	2	11	2008年2月26日(火)
昭和南海地震の体験談を聞く会	松山市雄郡地区	座談会形式	9	15	2008年3月15日(土)
事前調査兼昭和南海地震体験座談会	宇和島市津島町成	座談会形式	2	9	2008年6月22日(土)
事前調査兼昭和南海地震体験座談会	宇和島市津島町平井	座談会形式	2	10	2008年8月22日(金)
昭和南海地震の体験談を聞く会	愛南町御荘平城	座談会形式	10	9	2008年8月23日(土)
宇和島市民の地震体験談を聞く会	宇和島市文京町	座談会形式	5	9	2008年8月27日(水)
宇和島市地震体験談フォーラム	宇和島市住吉町	フォーラム講演	230	4	2008年8月30日(土)
事前調査兼昭和南海地震体験座談会	宇和島市津島町柿之浦	座談会形式	2	7	2008年12月10日(水)
愛南町久良地区地震体験談聴取会	愛南町久良	座談会形式	7	10	2009年1月22日(木)
久良防災フォーラム	愛南町久良	フォーラム講演	181	6	2009年3月8日(木)

また、住民の防災意識は災害体験の有無に強い相関があると考えられる。加えて、実際の災害体験がなくても地域住民の災害の体験談を聞くことや知ることによる追体験は、地域の防災意識の向上に効果的であると推測できる。一方、自主防災組織の充実強化が必要とされている1)ものの、現状では組織の結成を済ませても効果的な活動を持続している自治体や地区は少ないと考えられる。そのため、有効な自主防災活動が模索されているが、地域における自主防災活動の活発度は、防災に対する意識の高さや知識の量に依存していると思われる。災害体験談、特に自分の地域における災害体験談は地域住民に追体験を与えられると考えられることから、収集した地域地震体験談を当該地域住民に知ってもらうことが意識向上に効果的と考えられた。そこで、収集体験談を地域住民に聞いてもらう催しをフォーラム形式で開催し、その反応を観察するとともに、体験談に関する感想や自主防災活動に関連したアンケート調査を行った。一方、地震体験談提供者に対して、体験の記憶の焦点や鮮明さに関する質問とともに体験談を語る潜在的意欲などに関する別個のアンケート調査を実施した。体験者や体験談の聴講者に対して、体験談に対する意識調査を行い、体験談が自主防災活動に有意義であるという意識があることを明らかにしてきた3)。

さらに一歩進めて、フォーラムのような単発的な行事に留まらず、地域防災のための社会教育(自主防災活動)の実質化と学校防災教育の推進を同時に実現できる一助として地域災害体験を活用する試みをしてみたい。「災害は忘れた頃にやってくる」と言われるように、大規模な災害は繰り返すが、その繰り返しの時間は人生の長さよりはるかに長く、不断の努力とそれが組み込まれた社会の実現無しには災害体験の風化にあらがえない。戦後60年余経過する平和が続く現代には戦争体験にもその類型が見られる。自主防災活動に力を注ぐ努力が続けられているが、活動を主導する防災行政にも活動の主体である住民の両方に、高齢者を中心とする固定的顔ぶれによることにもよる画一的な活動から脱却できず、それが機能している実感は乏しいことが共通認識である。近代化とともに、世代間の連帯や地域内の連帯感が希薄になっている利己的な社会にも見える現代の社会に必要なものは、連帯、我慢、利他の精神を育むしくみであり、それを実現する方策を具現化する努力の端緒として、地域の自然・歴史・社会に対する理解を世代間で継承することを地域社会の連帯と教育のシステムとして実現することを目標にすることである。

基本理念を、老年から青壮年と幼少年に対する体験談の承継、幼少年と青壮年から老年への傾聴の表現、老年と幼少年に対する青壮年の見守りに置いて、災害体験の一連の総合的利活用を試行する。

本論文では、その一連の実施事例を報告し、その意義をアンケート調査の結果を交えて議論する。

2. 地震体験談収集と利活用の枠組み

表-1に前述したこれまでの昭和南海地震の体験談収集と利用の活動の一覧を示す。ここに示したように、地元消防や老人会の協力を得て個別に訪問したり座談会を開催して収集したが、座談会形式で開催すると、他の体験談を聞いて記憶がよみがえったり、あるいは、その違いに驚いたり、話すことにも聞くことにも積極的になっていく様子が見られたため、原則として座談会形式とし、そこで得られた体験談の中でも皆が聞き入るような記憶の鮮明な生々しい体験談を多くの人に聞いてもらえるフォーラムの開催を企画して開催した。

そして、愛媛県最南端にある津波被害が危惧される愛南町において防災に熱心な久良地区(集落群で1つの小中学校)で、前述のような地震体験談を活用した一連の総合的試行を著者が企画・実施した。具体的には、小学校と協同し、小学生による家族や近隣の災害体験者への聞き取り調査と作文の提出を冬休みの宿題として、災害体験の実態を調査するとともに小学生を核とした世代間の会話と体験談の語りと興味付けを意図した。その結果に基づいて地震災害専門家による体験者へのインタビュー調査を行い、震度や被害に関連する事項や行動などについて聞き取り、体験談に基づく震度や津波高さを推定し、調査結果を地震体験談に基づくハザードマップ素案としてとりまとめ体験談の活用法として例示した。また、記憶の鮮明な災害体験者と聞き取り小学生を話者にした地震体験談フォーラムの企画・実施・運営を行うという一連の総合的試行である。

一連の運営に当たっては、数年当地で根を下ろした活動を続けてきた学民官の会員からなる愛媛地震防災研究会(会長、森伸一郎)が消防とともにを行い、フォーラムの実施は、実施前日に設立された愛南町防災教育推進協議会(愛南町、愛南町教育委員会、愛媛大学防災情報研究センター、愛媛県南予地方局、国土交通省四国四方整備局大洲河川国道事務所)と同上研究会が主催した。

3. 小学生と専門家による地震体験談の収集

この試行事業では、小学生を対象とし、愛南町久良地区にある久良小学校協力の下、全児童（51人）に対し、「地震体験談を聞く」という宿題を、冬休み（平成20年12月24日課題付与、翌年1月8日提出）の課題として用意した。宿題の内容は、「聞いた体験談の内容」と「体験談を聞いた感想」をワークシートに記述して提出させるというものである。地震体験談の対象は、終戦翌年の昭和21年12月21日に起きた昭和南海地震を主とするが、昭和35年5月23日のチリ地震津波など他の地震でも良い。また、他の地域での体験談でも良い。そして、聞く対象は、祖父母・父母・兄弟などの家族か近所のお年寄りとした。一方、教員には、近所に聞きに行く際に2～3人で訪問して良いなど適切な助言を求めた。また、ワークシートには、体験談の提供者の氏名、年齢、体験場所などの属性の記入欄も設けた。

ワークシート回収後に、特に地震の揺れ、家屋や周辺の被害、津波の到達位置について記述のあるものを選出し、体験場所や家屋や周辺の被害のあった場所、津波の到達位置について該当者に追加で聞き取り調査を実施した。また、体験談の提供者には、体験談を聞いている時の児童の様子や、これまでに体験談を家族や近所の人に伝えたことはあるかななどの質問もした。

ワークシートは全児童51人から回収できた。回収率は

100%である。そのうち39人が久良地区での体験談を収集していた。兄弟などで同一人物から話しを聞いているため、28人の体験談を集めた。このことから、地区に昭和南海地震体験談が潜在しており、工夫すればたくさん収集できることが確認できた。

させる効果があると考えられる。なかでも、普段から尊敬の念で見ている祖父母の話として臨場感あふれる想像を喚起しているものと思われる。

4. 地震体験者へのインタビュー調査によるハザードマップの作成

前述したように専門家により対応可能な10人に対してグループインタビュー調査を行い、体験の詳細を聞き出した。なかでも、具体的な被災場所や津波の到達位置を確認することができた。これにより、揺れや被害や津波到達の実際について図化することが可能となる。図-2に久良地区における地震体験談に基づくハザードマップを示す。図中には体験談提供者が体験した地震とその位置、さらに、被災箇所や津波の到達位置を示してある。津波到達位置に関しては、昭和南海地震、日向灘地震、安政南海地震による津波の到達位置を示してある。安政南海地震による津波の到達位置に関しては、体験談の提供者



写真-1 フォーラム会場の様子

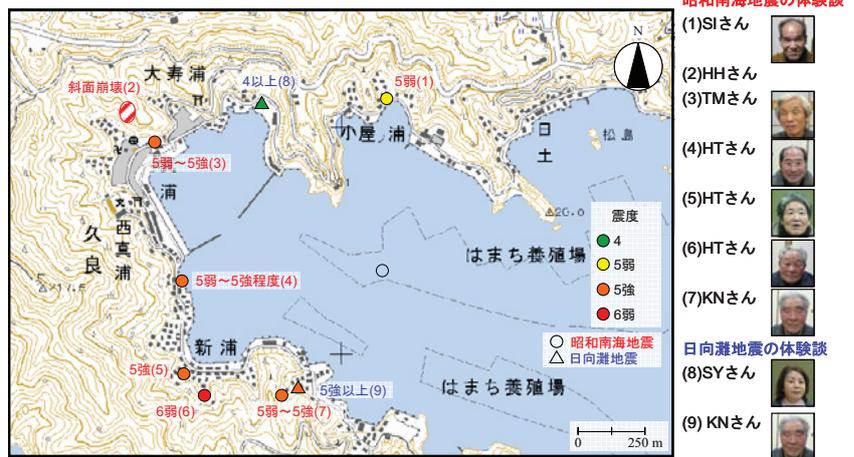


写真-2 体験談の語り



写真-3 会場児童のリアルな感想

地震体験談によるゆれハザードマップ（素案）



地震体験談による津波ハザードマップ（素案）

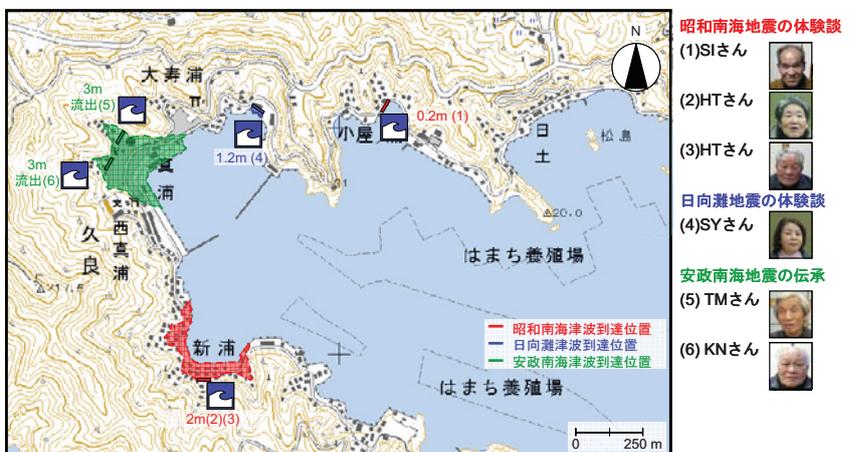


図-2 久良地区における地震体験談に基づくハザードマップ

が家の中のもの（村の史料、重要管理書類を含む）が流失した昔の自宅の地点を知っていた。

このように、地区内で複数の体験談を収集することによって、地区内での過去の地震による津波の到達位置を確認でき、体験談に基づく津波ハザードマップを作成できることが確認できた。

4. 地震体験談フォーラムの実施

フォーラムは、4名の体験談講話者と孫にあたる6名の体験談聴取児童と進行役の著者（森）が登壇して、36名の主催者と関係者、登壇者を除く84名の児童保護者、48名の児童を前に、体験談講話と聴取児童の感想発言をインタビューをする要領で進め、1つの体験談ごとに会場から感想などを聞くようにして進めた。小学生の忍耐力を考慮して100分の時間を用意したが、様々な事情で、主体となるべき体験談と感想の披露などの体験談の部は20分に制限された。体験談の部に先立つ時間帯では、そわそわし始めていた児童も、うつむいていた一般住民も、体験談の部では一人残らず熱心に聞き入っていた。また、児童の感想も「思いの外」出てきて、先生方や消防の方などは目を見開くように驚くほどの活況を呈した（写真-1）。そこで、1つの例をそのまま示す。

KN：コモズラのKNです。私最近、物忘れがひどくなりまして、自分でも、こりゃだいたいボケたなあと思っておりますけど、あのことだけは、案外と覚えていると思います。あの晩は、私は友達と3人で、コモズラの1番上の家、“てっぺん”と言いました。ところが、何時頃かはっきり覚えていませんが、ゴーという音がしますと、突然ドドンと音がしました。大げな音でした。これは爆弾が落ちたんじゃないやろかいうてたまげるくらい本当に大きな音でした。やがて、ユラユラユラーと揺れました。「ああ、これは地震ど。」ということになって、友達が、昔の家やけん障子でした、障子を開けろうとしましたが、「開かんど、開かんど。」「そりゃ反対やが。」ということで、大変慌てていました。私は臆病なので、布団をポッコリとかぶいて、おさまるのをじいっとまっていたんですが、なかなか止みませんでした。それでも、あまりの恐ろしさに布団をすかしてみますと、瓦がバタバタと落ちるのがわかりました。それで、外に出たら何が落ちてくるかわからんとということで、また3人が布団にもぐってましたら、やがてじいとおさまりましたんで、やれやれと思うて、3人話し合いで、「浜へ降りてみようよ。」ということになりました。浜というのは、海辺です。それで、浜辺へ3人が恐々と降りよったら、元老の方が「お前ら、浜に降りよったら大変ど。」と、「今、井戸の水がほとんどないようになつとるけん、大げな台風が、台風じゃない、津波がくるぞー。」と注意を受けました。それでも若い頃やから、面白半分「見に行こよ。」ということになり、海岸まで出ますと、あの当時はまだ“いしかけ(石垣)”でした。海岸も。そして、波が、サーときては、またサーと引きました。ああ、これが津波っていうのかなあと思うて、面白半分で見ましたが、やがて夜が明けまして、見ますと、ずうっと、地割れっていうか、道路がああ当時は舗装もしていません。私たちが入るくらい大きく割れていました。「それに足を突っ込んだら、揺れ戻しがきたら取れんようになるぞ。」と怒られまして。そしたら、小学校の子どもたちも、面白半分、足をはめたり、出したりして、大人、お爺さんやお婆さんさんに怒られておったのを今でも覚えています。それで、長老の方々も、

夜がはっきりと明けてからきましたんで、私も、「向こうはどうですか。」と聞きましたら、案外落ち着いて、「久良は今のところ被害はないよ。」とおしえていただきました。それで、ああ、こりゃよかったなあと思うたのを、今でもはっきり覚えています。（写真-2）

KN（孫）：地震や津波は本当に怖いんだなと思いました。家が倒れなくても瓦が落ちたら本当に怖いなと思いました。地震がくる前に準備をしておきたいです。

M：KNさん、この時お歳が17歳ですよ。ということで、17歳の経験が60年経っても昨日のこのようにこうやって語っていただけるということです。

KN：そうです。私は何でもすぐ忘れるんやけど、あがいな突然のことは案外と自分でもよう覚えているなあと思います。

会場児童A：私は、津波や地震がきたら、すぐ外に出たらいけないということを知りました。それと、津波がきたら浜に降りちゃいけないのに、降りたのをちょっとドキドキしながら聞いていました。（写真-3）

会場児童B：ぼくは、地震とか津波だけじゃなくて、道路とかも地割れとかしていたのがとても怖いと思いました。

会場児童：ぼくは、瓦が落ちて当たったりしたら危ないので気を付けておきたいと思いました。

5. 結論

愛南町久良地区において、昭和南海地震体験談を収集し体験談の活用について検討した。得られた知見は以下の通りである。

- (1) 学校教育の一環で児童に体験談を収集させることで、地区内で多くの体験談を収集できることが確認できた。
- (2) 地区内で複数の体験談を収集することによって、地区内での過去の地震体験談に基づく揺れや津波のハザードマップを作成できることが確認できた。
- (3) 児童が地震の体験者に体験談を聞くことは、体験者が普段話されることのない体験談を話すきっかけとなり、仲介者としての親の世代にも参加する機会となりうる。

謝辞：本研究を進めるにあたり、愛媛地震防災技術研究会、愛南町、久良小学校の皆様にも多大な協力を戴きました。記して、感謝致します。

参考文献

謝辞：愛南町の防災関係者、各地の自主防災会、老人会の皆様、愛媛地震防災技術研究会会員、に多大な協力を戴きました。記して、感謝致します。

参考文献：

- 1) 徳島市：昭和南海地震体験談に見る徳島市の姿と知恵, 151p., 2003.
- 2) 武村雅之：体験談から推定される1923年関東大地震の東京都における強震動, 地震2, 第50巻, 377-396, 1998.
- 3) 森 伸一郎, 久木留 貴裕：地域における地震体験談の収集と共有, 2008年地域安全学会梗概集, Vol. 22, pp.75-78, 2008.5.
- 4) 久木留 貴裕, 森 伸一郎：昭和南海地震などの地震体験談の収集と地震工学・土木工学の活用, 21世紀の南海地震と防災, 第3巻, pp.47-58, 2008.